

が麻痺し、上からの流水で呼吸が乱れる。上を見ても、下を見ても、ワイヤ梯子が大きな空間の闇の中に一条の光となって消えている。一番苦しい時間だ。55mを過ぎる。下方に白く光っているテラスを確認、さらに下降。完全にワイヤ梯子はそのテラスの上まで到達している。心の中で「やったやった」と叫んだ。テラス到達でテラスの丁度下方10m位で第Ⅲホールだ。全く大きいホールだ寒さと興奮で身体が震えが止まらない。誰も足を踏入れた事のない第Ⅲホールに立った。ホール一面モヤが霧の様にかすんでいた。そのもやの中に、ワイヤ梯子が頭上垂直に闇の中に消えていた。

第4次青海千里洞調査

——探検の真の目的——

水 島 淳

なぜ危険を冒してまで青海千里洞を調査せねばならないのか。第4次調査を目前にして、ふと私の頭をかすめた質問だった。なぜだろう。はたして、『そこに山があるから』というあの言を発した当時の岳人の心境の故なのだろうか。否。たとえそこに青海千里洞があり、それが未踏であろうと日本最深の洞窟であろうと、私にはそれを踏査する気持ちなどさらさらしない。私を引きつけた魅力は唯一つ、数名の学生が一つの目的に対し、力を合わせてそれを乗そうとしているということだった。大学4年間を通じて同学年同学部にありながら、話もせずに卒業する人々の中で、利害関係を持たない数名の部員が、上下学年一体となって一つの目的にぶち当たるその姿こそ、我々の乗りかけていた船の真の姿なのではないだろうか。青海千里洞は単なる舞台であり、我々に教えてくれるものは、自然の驚異でもなければ死の宣告を破棄する方法でもない。唯一つ、それは、一つの目的に対し数名の隊員が各々異った考え、性格、感情を寄せ集めて、どの様に協調し合い、どの様にそれを発揮したらよいかを教えてくれるものだった。

過去3回の調査で3点が問題とされた。第1に梯子不足である。前回不足分と予想堅穴継続分の合計100mを新に作製せねばならない。このために、出発当日まで梯子改良、作製に当った。第2の問題点は洞内キャンプの対策だった。洞窟調査の難度が高いため、少なくとも洞内で2泊はせねばならない。これに対処するため、過去2回の訓練を再検討した。第3に洞内流水である。洞内流水は直接アタックの成否を左右するどころか、人命をも危機に落とし入れる。これを打破す

るためには地形を正確に把握する必要がある。このために空中写真を購入し、実体視で洞口附近の地形を検討した。しかし、これらの準備にもかかわらず、結果として、新潟地方を襲った豪雨のために、底部を究めずして4度の後退を余儀なくさせられた。

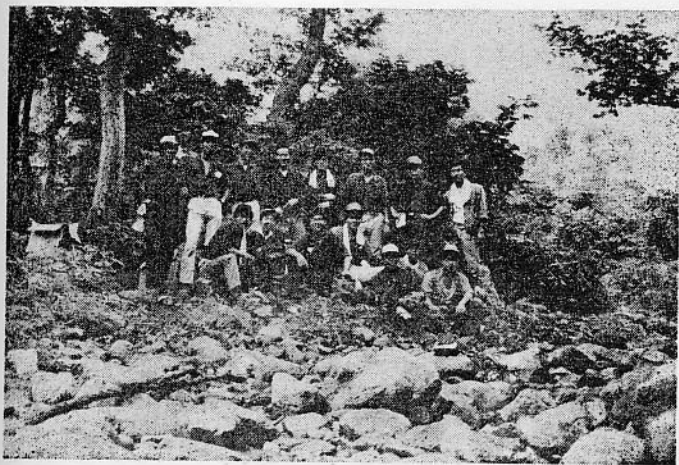
今回の挑戦を胸に誓いながらも、肩を落して洞口に背を向け、夕闇の迫るドリーネから消えて行く疲れ切った隊員の足元に、淡くキャブランプの光に照らし出された可憐な高山植物の黄色や紫が、今になってもなお目に焼ついて離れないのはなぜだろうか。一時的な感傷だろうか。これらの黄色や紫は過去4回我々を迎えそして見送ってくれた。そしてきっとまたその笑顔を見せてくれるだろう。いや見に行かねばならない。そのかぎりにおいて、我々はこの集団を忘れないし、それは意義あるものとして持続されていくにちがいない。青海千里洞、それは私にとって4年間の全てだった。彼が私に教えてくれたことは、日本記録ではなくて、彼が我々の最適の舞台であったということだった。

第5次青海千里洞調査

——これからの洞窟探検——

木 本 貴 夫

地理的に狭く、しかも高度に文明の発達したこの日本列島に探検と名のつく活動を求めるのは、闇夜を明りなしで歩くよりも困難であろう。日本の山地はことごとく踏破され、日本の河川は黒部川上廊下航行に成功した現在終末に近く、海底の探査も人間の力では軽石に等しい。地理的探検はその影を薄め、学術的探検も余地は少ない。このような状況下であり、なおかつ



第5次青海千里洞調査隊員（ベース・キャンプにて）